

# 救援・復興県民会議だより

〈発行〉東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議 No.14 (13・3・6)

〒020-0015

盛岡市本町通2-1-36

浅沼ビル6F

電話・FAX(兼)

019-601-5133

メールアドレス

fukkou\_ikg@hyper.ocn.ne.jp

## 被災者の声を！持ち家再建・災害公営住宅建設へ 「東日本大震災津波2年のつどいin大船渡」に300人



(会場は参加者でいっぱいとなり、熱気が漂う)

### 被災地復興「生活と生業に必要な公的支援を」

—東幹夫代表世話人が主催者あいさつ—

3月3日大船渡市民交流館カメラアホールにおいて「東日本大震災津波2年のつどいin大船渡」が、気仙地域をはじめ県内外から300人の参加で開催されました。オープニングは「岩手のうたごえ協議会」(会長金野洋子)35人による合唱演奏がされました。最後は「花は咲く」を会場のみなさんと一緒に歌いました。開会挨拶を「2年のつどいけせん実行委員会」事務局長佐藤良一さん(年金者合大船渡支部書記長)が行いました。冒頭、故人の冥福をお祈りのため(開会挨拶・佐藤さん)に「黙とう」を行いました。



主催者挨拶で東幹夫救援・復興岩手県民会議代表世話人は、「3・11から2年目を迎える今日、被災者本位の復興をめざす集いを、ようやく三陸沿岸被災地の一つ、ここ大船渡市で開催する運びとなりました」と述べ、「被災地復興の



(オープニング“合唱演奏”「岩手のうたごえ協議会」の皆さん)

最重要課題は『被災者の生活と生業に必要な公的支援を行わせること』であると挨拶をしました

### 来賓あいさつ



全国災対連大黒作治代表委(全労連議長)



高橋ちづ子衆院議員

(出席された国会議員から)

紹介(出席された県議会議員)

斉藤 信県議会議員

メッセージ

黄川田徹衆院議員、県議会「希望・みらいフォーラム」(代表佐々木順一)



### 講演

「住まい・まちづくり  
・明日へ」

立命館大学塩崎賢明教授

(講演する塩崎教授)による講演が「東日本大震災 住まい・まちづくり・明日へ」と題して行われました。塩崎教授は大船渡市に深い縁があり、現在、復興計画推進委員会委員長を務めているな

ど大船渡市復興計画の策定段階から携わってきました。塩崎教授は阪神・淡路大震災などこれまで被災地復興、とりわけ被災者の住宅問題について取り組んでいます。

阪神・淡路大震災では被災地から遠く離れた所に応急仮設住宅は建設され、しかも劣悪な居住水準だったが、それ以後の震災対策では改善されてきた。東日本大震災で住田町は画期的な木造仮設住宅をつくった。みなし仮設住宅について良い面もあるが支援活動が届かないなどの問題点がある。・・・等々を話すとともに、今後の住宅確保について、「自力再建」と「災害公営住宅」を比較しながら話しをすすめました。

自力再建では、自己資金に上積みされる支援金について「現行の最大300万円を600～800万円引き上げが必要、半壊にも適用するなどの拡充が求められている」と支援の充実を強調しました。災害公営住宅ではコミュニティ破壊や孤独死について阪神・淡路大地震以後も毎年多数の孤独死（18年間で1011人）が起きている、さらに、将来の空きや管理など自治体にたいへんな負担がかかることを指摘しました。これまでの木造公営住宅の事例を紹介し、地域にあった公営住宅建設（間取りや庭など）を考えることが必要だと述べました。

**「よくよく考えてちゃんとした生活がとりもどせるようにするところがふんばりどころ」**（NHKインタビューで塩崎教授の話；3/3 NHK盛岡が「住まいを考える講演会」として夕方放送）

住宅再建の前のまちづくりの問題では、「津波防災地域づくり法」にもとづき県が津波浸水想定提示し、市町村がまちづくり（土地利用）を計画する。高台移転問題など住民との合意形成、仕事や雇用確保などさまざまな問題がある。まちづくり事業には3年、5年かかる、当面の生活再建の

めどが立たなければ、地域を離れる人が増える。とまちづくりと生活再建のギャップを指摘しました。



## 「復興予算の流用」許さず、被災地に資金の投入を

塩崎教授は昨年9月のNHKスペシャルで「19兆円の復興予算流用」に登場した経緯をもとに

少なくとも2.4兆円が流用されたと厳しく批判しました。その上で、「被災者生活再建支援法の改正、支援金増額、半壊以下にも支援を」、「公営住宅の建設資金と生活再建支援金を総合的に判断して使えるように」、「グループ補助金の予算枠確保」、「人と金と制度の改善」のために被災地に資金を投入すべきだと強調しました。

## フォーラム「住まい・まちづくりを考える」

コメンテーター



（塩崎教授）

【報告発言者】



ろくろ石地域公民館  
村上誠需 館長



陸前高田市議会  
伊勢 純 市議



（塩崎教授） （村上館長）



（二人の報告・発言を聞く）

講演後、会場は「休憩」に入り、「住まい・まちづくりを考えるフォーラム」に移りました。塩崎教授に引き続きコメンテーター役として参加をして頂き、ろくろ石地域公民館館長村上誠需（むらかみせいじゅ）さん、陸前高田市議会伊勢純（いせじゅん）市議を報告・発言者として迎えました。

村上さんは猪川小校庭に建設された応急仮設住宅に住み、行政との連絡を密にするため仮設のろくろ石地域公民館を立ち上げて館長をしていると自己紹介。団地内に居住者は「やっとほっとしている」持ち家再建には手が出ない」「もう少し仮設で考えたい」など話しをしていると前置きをした上で、市内の仮設住宅団地連絡協議会をつくって知恵を絞り、地域の特性、コミュニケーションを守り、津波体験を生かした公営住宅建設をめざしたいと提案。そして、1人暮らしでも「茶の間」を備えた公営住宅が必要だと話しました。この提案には会場からも共感の拍手が贈られました。



伊勢市議は、陸前高田市の住宅支援策について到達点（最大715万円）を紹介し、沿岸自治体がこうした支援策をさらに高めていくこと、あわせて、国の公的支援策の拡充の必要性を強調しました。

この二人の報告を受けて、塩崎教授が村上さんの提案をもとにその実現を期待するとともに何らかの支援をしたいと述べました。伊勢議員の発言はもっともであり国の支援策が求められていると述べました。

会場からの質問・発言では、4氏からありました大船渡市内の上平団地に住む新沼さんは住宅確保の支援策を統一したものと要望。



釜石から参加した中川さんは災害公営住宅建設が当初計画から遅れている、年配者にとって平面のコミュニティは可能だが、7～8階建ての公営住宅では確保が困難だと発言。

また、大船渡市吉浜に住む田中さんは復興計画が一点（大船渡駅周辺）に集中しているが、市内の他地域におけるまちづくりについてもすすめてほしいと要望をしました。



県議である斉藤さんは、住宅の自立再建の最大の障害が資金問題である、公営住宅の希望者が増加している。復興特別交付税が県内の沿岸市町村に215億円配分されることから、現行の100万円の補助をさらに上乗せが可能となると発言しました。



塩崎教授は、質問に対して丁寧に答えるとともにあせらず、地域あった公営住宅建設が重要だ、国は実績づくりのために急ぐ、自治体に急がせるという状況（自治体では人員不足で手がまわらない）にあるが、安倍首相が自ら公言していることを言葉に終わらせずに実行させていくために、被災者が声をあげていくことが大切だと述べました。

### 「まとめ」と県民会議から「いわて復興一揆2013」の提起

つどいの「まとめ」を救援復興県民会議鈴木事務局長が行いました。鈴木事務局長は、この「東日本大震災津波2年のつどいin大船渡」が県内外から300人が参加をしたこと、陸前高田市、大



船渡市、住田町の2市1町から後援・賛同を頂くとともに、大船渡商工会議所、大船渡市農業協同組合、大船渡市・陸前高田

市観光物産協会から後援・賛同を頂いたことにお礼を述べました。3月3日は「昭和三陸大地震」から80年目にあたり追悼の日であること、またバス高速輸送システム（BRT）の開通（3月2日）イベント行事と重なったが、あくまでも仮復旧であり、鉄道による大船渡線復旧をめざして取り組んでいくことを強調しました。

その上で、県民会議からの提起「いわて復興一揆」を行いました。県民会議が被災者から寄せられている声は、「医＝医療・福祉」、「職＝仕事。生業」、「住＝住居」、「学＝教育」、「交＝交通」の5つの分野として整理されること、その具体的な要望要求は、①被災者生活再建支援金を500万円に引き上げる、②国の責任で医療費。介護費の免除措置の復活、③グループ補助金の延長・増額、④就学援助制度の拡充・学校統廃合は住民合意の尊重を、⑤JR大船渡線、山田線の鉄道による早期復旧これらの被災地の要望・要求の実現をめざす運動を総称して「いわて復興一揆2013」とする。当面、被災地域における組織づくり、「合意・賛同署名」運動をすすめることを提起しました。

## 三閉伊一揆に学び被災地から声を上げよう

前川慧一代表世話人が閉会あいさつ

「2年のつどい」の閉会挨拶で、前川慧一代表世話人は、釜石市内の小中学生が津波から助かったという一方で、鶴住居防災センターでは200人を超える犠牲者が出た問題にふれた。今年が釜石三浦命助も加わった嘉永6年の「三閉伊一揆」から160年の節目にあたる。「衆民のため死ぬる事は元より覚悟の事なれば 今更命惜しみ申すべきや」と、南部藩の重税等の悪政をやめさせるため藩境を超え仙台藩に訴えた「三閉伊一揆」に学び被災地から声を上げようと呼びかけました。

「つどい」司会・進行役をして頂いた二人

鈴木清きよ子さん（新婦人大船渡支部事務局長）と中村健さん（いわて労連事務局長）の二人です。

